
気ままに短編

猫屋敷 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに短編

【Nコード】

N8256X

【作者名】

猫屋敷 杏

【あらすじ】

今まで書いた短編をまとめました。基本的に1年経過するところに収められるかと思えます。お気に入り登録してください。皆様、お手数ですが、もう一度こちらにお願いします。

現在の中身 ・ 蕩ける瞳で愛を告げられた ・ うさみみについて
・ 約束 ・ ミヤコワスレ

蕩ける腫で愛を告げられた(前書き)

初書きになります。

蕩ける瞳で愛を告げられた

「私をあなたの手で殺してください！」

「は？」

蕩けるような瞳で言われた言葉に、呆けた声で返した俺は普通の感覚を持っていると思いたい。

*

“ 金曜日の放課後、裏庭の桜の木の下でお待ちしています。

”

木曜日の放課後、俺の下駄箱に女の子らしい可愛い薄水色の封筒に入った

これもまた可愛いのがシンプルな白い便箋に
可愛い、女の子の筆跡で

やたらと、簡潔な一文だけが書かれた手紙が入っていた。

それが始まり、だと俺は思ってるわけ。

勿論、近くにや俺のバカな友人がいて、俺が思わず出しちまった声に反応してやつらは当然の如く、俺をからかいだす。

正直、俺も思った。俺に恋文ラブレターが来るなんぞ、天変地異の前触れか！？

そんぐらい、俺には不思議で不思議でしようがなかった。

まったく心当たりなんてねえし。

俺の友人である、ヤツだったらまだ分かるんだが……。

そんな感じで悶々しながら俺は家に帰ったわけよ。

帰る道すがらも、延々とからかわれ続け……何の拷問かと思っただね。

自分でも意外な事だったんだが、俺はその夜なかなか眠れなかった。

遠足の前日だろうが、修学旅行の前日だろうが、テスト前日だろうと……俺は緊張とは無縁で生きてきたんだが……。

相当、緊張してたみてえだ。

次の日の朝、俺は珍しく寝坊し遅刻しかけた。もちろんあの恋文のせいだ。

気になって気になって仕方がない。

放課後が待ち遠しくって、授業にも身が入らない。

一時間ごとの授業がやたら長く感じられたし、イライラしてたみてえで周りの奴らから怯えた目で見られた。

その様子に気がついた俺の友人は、俺をからかい始める。
・・・見事な悪循環だ。

それでも時間は止まってるわけじゃねえから、ついに放課後が来たわけ。

そこで俺は気がついた。

“放課後” つつーのは時間で表すと何時からになるのか。

俺の放課後は、ショートホームルームSHRが終わってすぐだ。

授業が終われば、あとはこっちのもんだからな。
掃除なんかしねえし。

それで悩んだ。

これを書いた子の“放課後”の基準はどこにあるのか。
待たせたら悪い気がする。

いや、でも・・・もしかしたら性質タチの悪い悪戯いたずらかもしれねえ。
そんな感じで、迷いに迷った。

んでもまあ、俺はそんな悩み続けるような人間じゃないもんで。
まっすぐに、裏庭の桜の木のもとへ向かった。

一つ説明を入れとくとすると、
どこの学校にも、《ここで告白すると必ず成就する》だのなんだの
言われてる場所があるだろ？

ウチの学校ではソレが“裏庭の桜の大木”なわけ。

実際どんだけのヤツラが挑んで、どれだけ成就したんだが知らねえけど言われ続けてんの。

しかも、うちの学校ってのが結構入り組んでてコの字型が三つくつついたような形をしてるんだよ。

結構デカイ学校でな、一つのコの字を一学年が丸々使ってる。

裏庭に行くのにも時間がかかる。

土地面積がでかすぎなんだよな・・・。

そんで、その裏庭に行くためのルートは二つしかない。

一年側の校舎から行くのと、三年側の校舎から行くルート、これだけ。

んでも、俺が桜の木が見えるところまで来たら、もう彼女はソコに着いていたんだよ。

不思議だろ？

俺だって、まあ、多少は悩んだがそれでも直ぐに教室を出たんだ。若干不思議に思ったけど、彼女の顔を見れるだろう事に気を惹かれていてね、

それで終わっちゃったんだよ。

今思うと、あの時も少し考えとけばよかったんだ。

気が急^せいで、いつもの自分よりも早足で歩いてた。

近くにゆくほどに明確になっていく、彼女の姿。

桜の木の下にたたずむ、髪の毛の長い女の子。

桜の木に背中をあずけ、どこか遠くを眺めるように目を眇めていた。

今時珍しいまったく染色されていない髪の毛。

伸ばしてるのか、肩甲骨の辺りまである。

同じく珍しい、膝丈のスカート。

未だ見えない横顔は、どんな表情をたたえているのか。

まったくをもつて、俺らしくない。

彼女との距離が残り10mをきつたあたりで、彼女が俺の姿に気付いた。

彼女がこっちを振り向く。

冗談抜きで、俺にはそれがめちゃくちゃ長い時間に思えた。

そう思っている間も、俺の足は変わらず同じテンポで動き続け、
どんどん彼女との距離を縮めていく。

彼女が振り返りきって、俺と目が合う頃。

俺と彼女の距離は、3mほどになっていた。

風が吹く。

彼女の長めの髪の毛が風になびき、見ようによってはキレイな光景
だった。

彼女は、どこか幼さを残した顔をしていたし、眼鏡をかけていた。

俺は彼女の3m前でぴったり止まっていた。すると、彼女が俺の近
くまで近づいてきたんだ。

どれくらい、近くまでかってーと。

彼女のつむじを見下ろせそうなくらい。

それで、ビックリするくらい赤く火照った頬で、どこか潤んだ蕩
けそうな瞳で俺を上目遣いで見上げる。

恥ずかしいのか、少し躊躇うかのような間の後で彼女は口を開い

た。

「私をあなたの手で殺してください！」

冒頭に戻る。

*

俺さ、告られた経験って少ないけどさ……この告白はどつなの
って思った。

でも、もしかしたら今はこんなのが流行りかもしれねーし……。

俺はめっちゃくちゃ悩んだ。放課後の件なんざ霞んじまうくらいに
は悩んだ。

意外なことに、彼女は気が短いらしい。

なぜなら、俺がそんなふう悩んでいる時間に耐えられなかった
のか、俺に詰め寄ってきたからだ。

元からかなり近くにいたのだが、さらに近づいてきて、俺の襟首
を掴みそうなくらいになっている。

それでも、告白した手前赤くなった頬で、若干躊躇いのあるそぶり
だったが……。

それを見て俺が思ったことはただ一つ。

“ コイツ・・・マジだ。”

もしかしたら頭がイタい子なのか!?

なに、それともただの天然!?

そうこう思っている間にも時間は過ぎていく。

考えはまとまらないが、一つ彼女に尋ねる。

「殺してって、本気ですか？」

「はい！もちろんです！」

俺の聞き方も悪かったかもしれないが、相手の返答もおかしいだろう！

もちろんってなんだ！

「アナタのその大きな手で、私の首を絞めて殺してください。虫ケラでも見るかのような目で私を射抜いて、罵声を浴びさせて一思いに縊り殺して欲しいです。」

どこか怠惰な艶っぽい動作で彼女はうつむく。

蕩けるような瞳は変わらず、まるで恋をしているとでも言いたげな様子だから・・・。

余計、性質が悪い。

しかも、言っている内容は最悪だ。

俺を何だと思ってるやがるんだ！人殺しにでもさせたいのか・・・。

「なあ、アンタ俺のどこを好きになったんだ？俺はアンタを見たこともないんだけど。」

「何がって全てですよ？人を見下したような目も、相手を威圧するかのような大きな体も、まるで教師を馬鹿にしているかのような態度も全部全部好きです！私は様々な所からアナタを見ていました。」

正直。引いた。

え、何。どこから見られてたんだ？

てか、全てが好きですとか、そんな軽々しく言っているものなのか？

「だから・・・私と付き合ってください！

・・・付き合ってくれないなら、ホントに殺してください！むしろ殺して欲しいくらいアナタのことが好きです！」

俺は・・・どうすればいいんだ？

それなりに可愛らしい女の子に、「殺してください」と告白され、むしろ殺すことを強要されている。

誰か・・・助けてくれ！！！！

ある夏の、放課後。
桜の木の下での攻防。

(そう思ったのは俺だけなんだろうなあ……。)

今、俺の隣には俺の手のひらを凝視している、この^こ時世^{じせ}には珍しい黒髪の女の子がいる。
学校とは違い、眼鏡をはずした彼女は出会った頃よりも可愛く見える。

俺の手のひらを凝視しながら、軽く吐息を^{こほ}零しながらキミは言う

「……ハア、やっぱり絞め殺して欲しい……。」

中身はまったく変わってないが。

うさみみについて。

メイド服、ナース服、白衣、セーラー服、スク水、着物、ビキニ、
チャイナ服、スチュワードレス・・・あ、今はCAでしたか・・・
そして忘れてはいけないオプション、ネコミミにうさみみ・・・。

バーさん・・・。

うさみみ・・・。

「けしからん!...!」

「うわ、ウゼー。」

「人の好みじゃん。」

「この良さが分からないとは……。」

とある晴れた日の放課後。

とある屋上で行われていた会話。

その場にいたのは4人。

うち一人を除いてみんな眼鏡である。

明らかに……一般向きなメンツではない。

どこかと問われれば……

“顔が”

そうとしか、言い切れない。

先ほどなにやら叫んだ人物。

銀縁眼鏡ぎんぐわちに、やや神経質そうな切れ長の目。

髪は校則に従い、染色や装飾をまったく施していない耳にかかるほどの長さ。

制服も着崩しも、余分な装飾もまったくせずに着こなしている。

「大体、どこからそんな発想が湧いてくるのかが分からんわ!!」

常識人のようだ。

上記の人物に「ウゼー」と言い切った彼。
黒縁眼鏡くろいぶちに、穏やかな目。海外の血が混ざっているのか灰色に見える。

髪は見事な鴉の濡れ羽色のものを、背中の中ほどまで伸ばしゴムで結っている。

現在、制服の首元をやや緩めラフな格好となっている。

「人の好みにケチをつけるオマエのほうがかげしからんと俺は思うが？」（笑顔）

見た目を裏切る、中身をもつ御仁のようだ。

肯定も否定もしなかった彼。
赤縁眼鏡に、くつきり二重でやや大きな目。カラコンを入れているのか紫の瞳。

髪は右側のもみ上げ部分が長く、全体に白と銀と赤のメッシュを入れている。

制服は「これでもかっ！」というほどに装飾過多で、チェーンやらなんやらがかなりついている。

「どつちでもいーじゃん？俺はあ、うさみみよりもチャイナ服にココ惹かれるー。」

見た目以上に頭が湧いた人のようだ。

そして最後に発言した、また“うさみみ”について話した人物。眠そうに半分ほど閉じた目。もちろん真っ黒。

何故かがぶつっている帽子。ふざけているのか、黒いシルクハットにうさみみがくつついている。

制服は無駄な装飾をすることなく、普通に着ている。

「うさみみの素晴しさが分からないとか、人生の8割は損してるぞ」

信念は固いようだ……。

一般向きじゃないのは彼らがやたらと

『美形』

だったから。

「うさみみは遍くコスプレの中で一番支持率が高いんだ！しかもそのお手軽さは値段以上に見栄えのする結果に繋がるため、忘年会では忘れられないお供になっているんだ！！
バニーさんももちろんだが、うさみみの少年もなかなか評判がいいし！それに女性がうさみみを着けた時の威力はハンパないだろ！！」

先ほどまでの眠そうな目はどうしたのか、開眼しながらすごい勢いで話し始める。

「まず、なぜそんなことを論じなければいけないか、を聞いておきたいんだが!!」

やや赤い顔の銀縁眼鏡が反撃にでた。

「好きなものを語る事がいけないなら、お前がまず死ねばいい。」

それを黒縁眼鏡が笑顔で潰す。

「そーだ!! うさみみの何がいけない!?! うさみみは素晴らしいんだ!!」

「いや、イイとは思うけど? ソレよりもイイもんもたくさんあんじや〜ん?」

「そういう問題ではない!」

「あくたしかに〜。うさみみに敵^{かな}わないけど、いいやつもあるな・・・」

「うさみみのドコにそんなに惚れこむ要素があったんだ?」

黒縁眼鏡の一言にさらに目を輝かす、うさみみシルクハット。

「すべて! 値段の高いものと白く輝く美しい毛並みのものもあるし、女性の黒髪を引き立てるかのように、しかしあくまで存在感は消さずに共生できるところは素晴らしい!

それにあの悩ましげな視線!! 罰ゲームとしてつける事になってしまった、彼女たちの表情! 恥じ入るかのように薄く頬を染め、熱を含む潤んだ瞳で見られたらもう!! たまりませんなあ!!!

ピンと伸びた耳も好きですが、へにやりとなった耳もたまりませんね!

あ、うさみみと云えば“白”だと思うでしょうけど、黒い耳も全然イケますし。むしろバッチコイですし! ああ、でもどうします? ち

よつと薄めのモノトーンカラーの服を着た、割りと体のラインは整った女性がうさみみをつけて自分のそばにいる。寂しがりやな兎のように自分に体をすり寄せ、うさみみが思わず自分の頬に触れ、その耳に触れると彼女はビクリと体を震わせ、仄かに赤い頬と潤んだ瞳で自分を見上げる。彼女の目を見ようと僅かに視線を下げると、彼女の白い谷間が「もういいわ!!」「」

銀縁がキレた。

しかも何を想像したのか、先ほどよりも顔が赤い。

見れば黒縁や赤縁も、若干頬が赤く染まっている。

それを見てニヤニヤとした顔で言い出す、うさみみシルクハット。

「そうだろう、そうだろう! うさみみの素晴しさがわかったか!」

「たしかに・・・素晴らしいな。」

「ああ、やべえな・・・。」

「だろう!」

うさみみは素晴らしいのだと豪語する、うさみみシルクハットはその時勝利の余韻よゐんに浸っていて気付かなかった。

銀縁が言葉を発していない事に、そして黒縁、赤縁の様子が平常とはやや違う事に。

黒縁と赤縁が目線で会話を始める。

銀縁は言葉を取り戻し、反撃に出る。

「ある意味、その想像力には感心する。だが、一つ言いたいことがある。

お前は、性別は女だろう!!

そこまで、想像を膨らませるのはどうかと思うぞ!!」

「カンケーない。」

銀縁、負けて沈み込む。

まさに、沈み込むというのがぴったりで、両手と膝をついて項垂れうなだている。

それに満足したかのように、うさみみシルクハットは空を見上げ、空に手を突き上げる。

「うさみみは……永遠だ……。」

突如、赤縁が動く。

赤縁がうさみみシルクハットの突き上げた手を取り、背後から彼女を抱きしめるように拘束する。

驚いたのか動けないでいるうさみみシルクハット。

それをいいことに赤縁は彼女の首もとに、顔を埋める。

頬がかすかに赤く染まる。

それを認めた黒縁はゆっくりとうさみみシルクハットに近づき、シルクハットを取り上げる。

帽子の中にしまっていた黒髪が零れ落ちる。

帽子をかぶっていれば男にも見えた彼女だが、髪を下ろしてみれば流石に女性に見える。
しかし、不満なのか黒縁を睨みつけている。

「帽子かえせよ。」

ニツコリ笑った黒縁。

「返してください、だろ？」

「返してください！！」

ニヤリと笑い、黒縁は彼女の頭に帽子をのっける。

一瞬、視界を塞ぐように黒縁の手が目元に下りてきて、

ちゅっ

左側の首筋と、右頬に柔らかな感触を憶えた。

「
っ!?!」

驚いた表情で固まる彼女の前で、黒縁は鮮やかに、艶やかに笑う。

「さて、捕まった兎は・・・どうなると思っ?」

耳元で、意地悪く問いかける言葉に彼女は暴れだし、

腕から抜け出して、真っ直ぐに階段を目指す。

屋上の扉を乱暴に開け、派手な音を立てながら扉は閉まった。

最後にちらりと見えた横顔は、熟れた林檎よりも真っ赤だった。

約束（前書き）

夏のホラー企画に参加した作品です。

約束

彼は、柔らかく微笑む。

それに答えるように、隣に座った女も、笑った。

2人の指は絡み合い、幸せな約束でもしたのだろう。

その表情は、あまりにも明るかった。

*

ひっそりと、寝静まった町の中で、一つの影が蠢く。

物音をあえて、抑えようとしている様子ではない。

ただひたすらに、その夜の空気に溶け込もうとしている様子ではあった。

黒い、色ばかりを纏った女。

所どころに設置されている街頭の、人工的な色を浴びて、それでも漆黒は崩れない。

黒いパンプス、黒いコート、黒い手袋、黒いキャスケット帽、背中を流れる長い髪の毛も勿論真っ黒。

ただ、その顔を彩る唇だけが、鮮やかで、艶やかな赤。

唇よりも色褪せた、およそ鮮やかだとは云えないような赤色のポストの前で、彼女は足を止めた。

隣の街灯とは50m以上も離れた位置に、ポツリと一緒に置かれている。

街灯の光によって出来た女の影が、怪しく伸びる。

「……。」

腰にたくさん付いた鍵の中から、迷わず一つを取り出しポストを開ける。

かちり、小さな音がする。

そこで、一瞬だけ彼女の動きが止まる。

迷う、ではなく躊躇、でもなく、ただ何かを感じたかのように一瞬ピタリと動きを止める。

しかし、まばたき一回の間にその動きは掻き消える。

そして、ポストの中身に目を凝らすように、一瞬たりとも見逃す事が無いように、まばたき一つせず見つめる。

ゆっくりと、その黒い手袋をはめた手が開ける。

ことりと、小さなものが落ちる音がする。

ただ、その形は女の影に入ってしまったようで、よく見えない!

女は、それを拾い上げてコートのポケットの中に入れた。

もう一枚、ポストの中に入っている、白い紙切れ。

鮮やかな赤で書かれた、一枚の葉書。

女の唇が、三日月のような弧を描いた^{えが}。

*

暗い部屋。

雑多に物が積み上げられ、その部屋に住んでいる男にしか、物のありかは分からないに違いない。

真夏の深夜、暑さと悪夢に魘されて彼は目を覚ます。

先日、彼は女に捨てられた。

時刻は丑三つ時。

よくあるように、何処と無く気味の悪い時間帯。

彼女の誕生日に、彼女の部屋を訪れた。彼女がくれた部屋の鍵を持って。

ゆっくりと立ち上がり、水分を取るために冷蔵庫へ向かう。

冷蔵庫の隙間から、人工的な橙色の光が細く漏れる。

しかし、そこは蛻せぬけの殻。

中に入れておいたミネラルウォーターを取り出そうとしたとき、玄関のチャイムが鳴った。

ピンポン。

「？」

非常識すぎる客。

それとも、ただ単に戻る部屋を間違えたのか、そう思った男は扉に目もくれずミネラルウォーターを口にする。

全てを捨てて手に入れた女だった。

田舎くさい、昔は隣にいた女も、友人も会社も、全てを捨てた。

そうして、手元に残ったのはたくさんの負債。

手に入れた女は、どこかに消えて。

思い出に浸る暇すらない。

呼び鈴の音の間隔が、先ほどよりも早くなっている。
男はそれに苛立った。

手にしていたペットボトルを荒っぽい動作で投げ捨て、玄関へ向かう。

女は『約束』までしていったのに。

思いよぎるのは最後の電話。

“アタシめっちゃ幸せ。本当ホントにありがとう。”

アカン 証まで買い与えた。

今までのどんな物よりも高額な買い物。

チェーンをはずさないままに、扉を開けて見ても誰もいない。

「？」

ふと、彼が思い出したのは幼い頃の記憶。

田舎くさい、昔の女との思い出。

今の生活に比べれば、ぬるま湯のように安穩として物足りない場所。

誕生日のたびに重ねた言葉。

贈ったのは根拠の無いたくさんの言葉と、綺麗な綺麗な道端の石。

彼が彼女を捨てるその日まで続いた、恋人ごっこ。

“大きくなったらけっこんしよう！町のきょうかいで真っ白いウエ

ディングドレスを着て、”

「……あなたの隣を歩きたい……。だったか？」

ふと、閉めかけていた扉の向こう、闇の中を覗けば、闇よりなお深い黒が、そこには存在した。

ゆーびきりげんまん、うつそついたらはりせんぼんのーます
！ゆびきった！！

「……………お届け物を、お持ちいたしました……………」

闇の中から、艶やかな赤だけが動く。

「……………印鑑を、いただけますか……………？」

まるで何かに縛られたかのように、体を動かす事が出来なくなっている。

視線はその唇に寄せられ、吸い寄せられたかのように固定されている。

「……無ければ……拇印ぼいんをいただけですか……？」

ゆるゆると、彼の体が動き出す。

よく見れば彼の表情は凍り、どこか焦っているかのように異常なほど顔色が悪い。

彼の左腕は歪よこに動いている。

まるで、マリオネットのように。

その左腕をとった女は、唇に笑みを刻んだ。

「……ありがとうございます……。」

歪よこな音が響いた。

するりと、影が扉の僅かな隙間から中に侵入する。

重なるように響いた悲鳴は覆い隠され、扉が閉まる。

「……代引きとなっておりますので、どうぞ対価をお払ください？」

先ほどまでは魘おそされるほどに暑かったというのに、今はもう青くなるほどに寒いのか。

雑多なものの中に混じるようにして、腰を抜かしたのか男は立ち上がらない。

いや、立ち上がれない。

男の顔色と反比例するかのごとく、赤い朱い液体が流れ出す。

女は、恭やうせいしく男の手をとり、どこか陶然とうぜんとした様子でその左手に

舌を這わせる。

「……………あなたの熱を……………」

帽子の隙間から見えたその瞳は、溢れでる血液のように無表情な赤だった。

*

田園風景の広がる町の、川沿いを一人の女が歩いている。

どこをとっても平穩でのどかな、都会の人間が憧れるような風景。

包帯に巻かれた小さな左手に、痛むであろうその手にわざわざ小さな包みを持つて。

女は上機嫌だった。

野暮つたい眼鏡も、数年前に流行った時代遅れの髪形も、今の彼女を曇らせる事は出来ない。

左手にある小さな包みに頬擦りする。

とても幸せそうな表情^{かお}で、ピンポン玉を楕円にしたような大きさの白い包みに頬擦りをする。

どこかに落としたりしたのか、または汚したのか、赤茶色の染みが所々に出来ている。

女は上機嫌だった。

朝のニュースで今までで一番嬉しい、報道があったからだ。今日はその報道で独占されて、その報道を一度も流していない局のほうが少ないほどだ。

嬉しい。

そして、あの日自分を捨てた男のことを思い出す。幼い頃からの約束を、簡単に破り捨てた男のことを。

『今朝未明、アパートで××さんの遺体が発見されました。』

久しぶりにメールが届いたのを見て喜ぶ女に、突きつけられたのは心変わり。信じられなくて、直接会って話そうとした。

『遺体は、体の血液の半分以上が抜き取られ、部屋中に飛び散っており、』

やっと通じた最後の電話。

彼は、今まで聞いた事の無い声で一言。

“お前なんて、もういらねえんだよ”

『体の大部分を切断された状態で発見されました。』

一言で切られて、それから何度もかけ直すが、幾度かけても繋がる事は無かった。

“なんで、どうして”、感情が重なり合う。

『なお、犯人は未だ見つからず、捜査中とのことです。』

彼女は小さく笑う。涙で光るその頬を、歪よこしまにゆがめて。

“自分のもとに居てくれないのなら、他の人間が忘れてしまえばいい。”

そうすれば、彼はズーッと私のものなのだ、そう思った。

『また、遺体から左手の小指が無くなっていた事から、猟奇的殺人である可能性が高いとのことです』

暗い部屋で一人、女は笑う。

少し前からネット上で広まった噂。

代価を払う事で、その願いを叶えてくれるイキモノの事。

女はそれを使った。

『なお、××さんの部屋には犯人を特定する物証が存在せず、捜査は難航しているようです。』

誰にも見つからないように、音を忍ばせて深夜の町を歩く女。まるで何かにとりに憑かれたかのように、その目は獣のような光を宿している。

ざあざあと、風が騒ぎ、次第に曇り、雨が降ってくる。女の手からこぼれた色が、雨に流され不気味な筋を作る。それでも女は笑みを崩さない。

『・・・速報です。x xさんの部屋で、』

女の町に存在する物の中で、街灯の真下に置かれたソレがあるのは、町外れに置かれたソレだけ。ゆっくりとした歩調で女は歩く。

右手に葉書の入ったビニール袋を、左手に切りとったモノを持って。

街灯の下に立つと、女はそのポストの中に持っていた葉書と、切り取った自分の小指を入れた。

『彼のものではない小指が発見されたそうです。』

女は歩く。

昔、男と指切りを交わした場所へ。

町の奥まった場所にある、小さな小さな2人だけの秘密の場所。たくさんの木々と、近くを流れるせせらぎの音。

季節になれば色とりどりの花が咲き、それに釣られるように美しい蝶が現れる。

秋になれば彩いろどりが、山々の木々が紅く染まりとても美しかった。

幼い頃は、それほど感じることの無かった景色も、今見ればなんと美しく見えることだろう。
その頃の自分たちの姿を思い出しているのか、その瞳は懐かしそうに揺れる。

たくさんの木々が生い茂っている道を、女は何のためらいも無く行く。

女の通っている道は、道というのがおこがましいほどに形が無い。人に忘れ去られ、感情を抱かれる事の無くなったものたちは、簡単に形を崩していく。

目の前に茂る木々が伸ばした枝が、女の髪や腕、足に絡みつく。それでも・・・女は足を止めない。

それから数分たった頃だろうか。
ぴたりと、女は足を止める。

眼前に広がる景色は女の目にどう映るのか。

時間が経ったことによって、大きくなつた木々。
原っぱようだったそこは、木が生い茂り光の射さない場所になつてしまつた。

木が空を覆つてしまつたせいで、地面に光が届かず奇妙な草葉ばかりが茂っている。

その中央に、女は再び足を進ませる。

その場所に良く座っていたのだろうか。向かう足には迷いが無い。

小さな音と共に、女は身を投げ出すようにして横たわつた。

しばらく、じつとしていたかと思うとおもむろに上半身を起し、自身が持っていた小さな白い包みをほどき始める。

ゆっくりゆっくりと、時折中にあるものが無くなっていなにか確認

するかのように日に透かしたりしながら。
次第に大きくなる赤茶けた染み。

ほどくにつれ、楢円は崩れ細長い形に変わっていく。
女は焦らない。

ゆっくりゆっくりとほどこいていく。

最後の布が落ちていく。

現れたのは指。

女はその指に口付け、嬉しそうに微笑む。

包帯の巻かれた左手にその指を握り締め、右手でポケットをあさっている。

探り当て、出したのは白いハンカチに包まれた、裁縫用の『針と糸』。
白いハンカチの上に指をそっと、壊れ物を扱うようにおき、針に糸を通す。

「」

何が欠けてしまったのか、女からどこか異様な雰囲気を感じられる。

幼子のように無邪気に、ただ純粹に求め続ける。

糸が通った針を見えない空にかざして、楽しそうに笑う。

糸が通ったのをしっかりと確認した後、今度はその手に巻かれていた包帯をほどき始める。

さきほどよりも、幾分はやく、どこか急ぐように。

長い長い包帯がほどけていく。現れたのは欠けた左手。

小指だけが根元から欠けてしまっていた。

女は左手の小指があった場所に、ハンカチの上に乗せていた指を当て縫い始めた。

ちくりちくりと、一針刺すごとに紅い赤い血が流れ出していく。女はその様さえも楽しそうに眺めている。

指の周りを縫い終わった時、もともと白かったその糸は、あふれ出る血液によって真っ赤に染まっていた。

その指を満足そうに眺めると、女は目を瞑り仰向けに横たわる。

胸の辺りでゆるく手を組み、静かに横たわる女。

辺りには虫の音が響き、日が傾いてきているのか仄かに暗い。

僅かに射す光を浴びて、眠るように目を閉じた女は輝いていた。

『今日、町の町外れにある林の中で、さんの遺体が発見されました。遺体は、頭部と左手の平を除き、切断された状態で見つかりました。また、さんの残されていた左手には先日殺害されたさんの失われた小指が糸で縫いつけられており、警察は彼女を犯人だと踏み、後付捜査をしているもようです。なお、見つかった遺体は、既に数日経っていたのか損傷が激しく死亡推定時刻を割り出すのは非常に難しいとの事です。』

貴方は失われたものを手に入れたいとき、どうしますか？

もしも、代償をはらう覚悟があるのなら、その小指を街灯の下に置かれたポストの中にお入れください。

貴方の名前と、ほしいものの居場所、そして貴方の契約の印があれば、すぐにお持ちいたします。

さて、この嘶を語った、私は誰でしょう？

ミヤコワスレ

好き…

好きだよ。

この世の全てと、君を天秤にかけたら…君の方が傾いてしまっく
らい。

もっと私を見てください。

もっともっと、私に触れてください。

これが法に触れていても、もしも禁忌だったとしても

私はあなたを求め続ける。

好きです

好き。

好きだよ…

病院のベッドの上で、ただただ涙を流し続ける一人の少女が居る。目をつむり、腹の上で手を組み合わせて、祈るように。

少女は真っ白だ。

唯一、髪の毛だけが黒い。

その閉じた瞼も、浮き出た鎖骨も、骨ばった手の平も。

静かな、静かな空間。

少女の口から洩れる僅かな呼吸音がなければ、この部屋の中の音という音は無くなってしまっていただろう。

そしてその呼吸音だけが唯一、少女を生きていると周囲に知らせた。

ぼつりと、一つだけ置かれたベッドの中。

少女は今日も涙を流し続ける。

会いたい

会いたい

あの人に会いたい。

でも会えない。

知ってるよ。だけど、それでも会いたい。

あの人がそこにいるなら、私はどこでも平気

もう「嫌い」だなんて冗談でも言わない

ねえ、会いたいよ…

私を、見てよ…

がちやり、小さな音を立てて扉が開く。

入ってきたのは、一人の青年。

外の景色とは裏腹に、厚手のコートを身にまとっている。

吐いた息は熱をはらみ、日に当たったコートはその色ゆえにとても熱い。

青年は、その熱さに眉をひそめることも、コートを脱ぐこともせず静かに少女に歩み寄った。

ベッドの傍らに立ち少女の様子をうかがう青年は、おもむろに手を伸ばして少女に触れようとした。

しかし、その手は途中でピタリと止まる。

もう一度、今度は強い意志を持って少女の頬に手を伸ばす。

今度はばちりと、静電気を何倍にもしたかのような大きな音が鳴る。青年の指先には電気が走ったかのような光が現れ、一瞬で終息

する。

僅かに臭う、焦げたようなにおい。青年の手が収まっていた手袋が燃えてしまった。

燃えるほどの威力で指先が痛まないはずがないのだが、青年は痛みに対する反応を一切しなかった。

その代わりに表面に現れたのは、苛立ち。

眉間にしわを寄せ、イライラしているのか手に残る手袋を脱ぎ捨てる。

脱ぎ捨てた手袋は、ぱさりと一つ音を残して床に落ちる。真っ白な床に落ちた一つの染み。

再び伸ばした指先は、やはり少女の目の前で見えない壁に拒まれる。

周囲にあふれる光よりもはるかに獰猛で、殺意に満ちたその光は青年の指先を舐めるようにして焦がした。

「
」

青年の唇が音を紡ぎ、その音が周囲に響いた途端。その光は姿を消す。

青年の口から出た言葉は“音”であって言葉ではなかった。それ以上でもそれ以下でもない。

ぱちり、最後の無駄あがきのように光がはじける。

ほんの少しだけ、皺が少なくなった眉間。

青年がさらに手を伸ばし、あと数ミリで少女の頬に手が触れそうになった瞬間、彼は今度はさつき以上に眉間にしわを寄せ自分の掌を引き寄せた。

青年が伸ばした手の平は酷く焼け爛れてしまっていた。

そんな手で触る事を良しとしなかったのだろう青年は、その手をきちんと袖にくるみ込み反対の手を、今度こそ少女の頬に触れさせた。

すると、それはとても静かな撫で方だった。

それを表現するのはとても難しい。壊れものを扱うようなとはよく言うが、そんな扱い方ではない。

もっと切実で、求めてやまないのにどこか空虚な触れかた。

そうすることしか知らないような、どこか幼い所作。

青年が触れたことによつて少女が覚醒してきているのか、少女の目蓋まぶたが震え始める。

それを認めた青年は、身を引くようにして少女の頬から手を離れた。

小さくむずかる様に、幼子がいよいよするように首を振り小さく声を上げる。

それをじつと見つめる青年。ただただ見つめるだけ。少女はうめき続けるだけ。

すると、突然目を見開いて眼を覚ました。

何の兆候もなく、いきなり目をこじ開けるかのような目覚め。

上体を起こし、息を切らす少女に青年は水を与えた。

「…ありがとう…。」

少女の言葉に一つ頷く事で返事をし、頭を撫でる。

「…また、“夢”を見たのか？」

「うん。」

少女の言には少し、突き放したようなところがあった。聞かないでいてほしい、けれど聞いて欲しい。

「…また、何かを殺す？」

青年の物騒な言葉に眉を寄せる少女。しかし、少女はその言葉に首を振った。

「違う…心から叫んだ。…“会いたい”って、“愛してる”って。」

あんな夢を見るのも、あんな気持ちになるのも初めてで…感情に整理がつかないのだと、少女は言う。

「私には、どうしてあそこまで必死になるのかが理解できない。会えるのならどんな形になったって構わないなんて…理解できない。」

そんな風に言い連ねる少女の頭を、青年は優しく撫でた。何も言わず、静かに静かに、少女の気が落ち着くまで。

ああ、私はどうしても貴方に会いたいの

会えない

世界さえ、白黒モノクロに変わっていった

あなたのいない世界は苦痛で

誰も…私のことを覚えていない

寂しい。

「…ああ、花弁ハナヒラが一つ落ちちゃう…。」

少女が、突然口走る。

「どこだ？」

青年は、それに驚いた様子もなく少女に問いかけなおす。

少女は遠くを見つめ、何かを読み上げるようにして言葉を返した。

「東地区…中央病院、4階…角。」

「“夢”は？」

「“ミヤコワスレ”…一時の休息と、穏やかな別れを…彼女に。」

少女は自分の目の前に置かれている小さな小瓶を青年に手渡した。
小さな小瓶の中には、紫色の小さな花弁の花が2輪。

ベッドの中の少女は薄く微笑みながら、青年に小さく小さくつぶ

やいた。
それはまるで、

「対価は、彼女の待ち焦がれた相手の名前。」

口の中までも溶かす、蜜のような毒。

くすくすと、何かを楽しむかのように少女は嗤う。

「大丈夫。あれだけ待ち焦がれていたのだもの、名前程度じゃあ揺るがないはずだわ。」

まるで人が変わってしまったかのように、少女は笑い続ける。

「さあ、早く行って？^{ハナヒラ}花弁が勝手に散ってしまう前に。」

片手に小瓶を持ち、立ち尽くしている青年に少女はお願い（・・・）をする。

それはまるで、小さな子供が誕生日プレゼントをねだるかのように。

くるりと、踵^{かかと}を返し青年は部屋を出ていく。
ぱたりと、黒い背中が消えてしまった。

少女は、ベッドから降りる。

まるで監視が居なくなるまで待っていたかのような、そんな嬉しそうな表情で。

冷たいリネンの床に、少女の小さな足音が鳴る。

向かった先は、大きなクローゼット。

部屋の中や少女と同じように、クローゼットもまた白い。

手をかけて小さな音を立てるだけで、クローゼットは静かに開いていく。

かたり、クローゼットが開ききると中から大きな棚が姿を現した。それもまた真っ白で、すりガラスが一面に張られている。

少女は精一杯、手を伸ばして上から2段目のガラスを横に引いた。白いガラスに彫刻された、たくさんの花々。

目を引くよりも、どこか禍々しさを感じるその中から出てきたのは……たくさんの小瓶だった。

少女の手は迷うことなくそのうちの一つに伸びる。

上から2段目、左側の左側の一番奥。

真っ白く、星型の花瓶ハナヒラをつけた小さな花の入った小瓶。

うつとりとした表情で少女は瓶を見つめる。

その真っ白く、しつとりとした指先で優しく瓶を撫でた。

美しい桃色の唇で、少女は小さく小さく笑う。

「ねえ、もうすぐこの棚一杯になるわ。“ハナヒラ”さん。」

あと少しだよ。楽しみだわ。

そう言って、彼女は小瓶にキスをした。

冷たいリネンの床に、かたい音が響く。

青年の黒は、背景に溶け込んで違和感のないものになっている。はたから見れば、まるで首だけが浮かんでいるようだ。

不思議なことに、この階のナースステーションには灯がともって

いない。

急患かなにかがあったのだろう、人の気配は全くなかった。

病室の中にいる人々も、もう眠りについていていのだろう。全く音が無い中、青年は一人歩を進める。

目指す先にあるのは、西の角にある病室。

片手に持っている小瓶に目をやれば、淡く光っているのが目に入る。

その光に、この場所が正しい事を確認して青年は、扉に手をかけた。

綺麗な綺麗な光を見たよ。

ねえ、私もそろそろあなたに会えるでしょうか。

早く会いたいな

ああ、思い出の中だけのあなたじゃ足りない

忘れられないよ

早く、早く…

ああ、赤い花が咲いていく。

もうすぐかもしれないよ。

待ってて？

青年は、暗闇に交じり音もなく室内に侵入する。

病室の中は月の光で満たされており、その中心ともいえる場所にベッドが置いてあった。

ベッドの上にいるのは、一人の女性。

しかし、女性は年齢に寄らない容姿をしている。

ベッドに横たわる姿は、どう見ても三十代のそれには見えない。

まるで、若さもそれに伴う生気までも奪われてしまったかのようにだった。

ベッドの中の女性は、一人涙をこぼしている。

口元には呼吸器を、枕元にはたくさんの画面のついた箱を。

箱はまるでそれ自身が呼吸でもしているかのように、一定の時を刻んでいる。

青年は足音を一切立てずにベッドに横たわる女性の元へと近づいていく。

そつと手をかけたのは、彼女のベッドの脇に置いてあった花瓶。

花瓶には豪華な花々が咲いている。

それは、見る者にどこか違和感を与えるような美しさ。

真っ赤な薔薇に鮮やかな百日紅、それを支える雛罌粟ひなげし。ところどころに見える真っ白な霞草かすみ草を除けば、真っ赤と言っても差し支えないほどの色。

青年は花々に手をかけた。

ただ並んでいるだけの赤い花たちを、どこか法則づけて並び変える。中央付近には薔薇を、薔薇の周りに霞草かすみそうを。左側に百日紅さるすべし、右側に雛罌粟ひなげし。

青年の手は一切の迷いもなく花たちを並び変えていく。今までと同じ花々が、青年の手によってまったく違う装いに変わる。瓶の中の花を薔薇の、花々の中央にひっそりとさしこむ。

左右に広がる様に、しなだれるように形を変えられた花は…どこか彼岸花に似ていた。

青年は一つ満足げに頷いて、ベッドに横たわる女性を振り返る。静かに女性の耳に囁きかける青年は、不思議な視線を、この場に不釣り合いな視線を女性に向ける。まるで、捨てられた猫を見たときのような、そんな表情。

「良き夢を。」

「人は、どうして夢を見るんだろうね？」

クスクスと小さな声で少女は笑う。

問いかけられたのであろう、その対象であるはずの青年は口を開かない。

ただ、じっと何かを見つめ続ける。

「知ってる？英語には、夜みる？夢？はあっても願う？夢？の表現はなかったんだって。」

それって、とっても素敵だと思わない？

誰も夢を見ないで、ただただ自分出来る事をひたすらこなすだけ。望みはあっても夢ではない。思いの分だけ動く。」

それって、とても合理的だわ。

そういつて少女はおかしそうに笑う。

「ねえ。そうは思わない？

死にたいと願うほどに夢見るおバカさんたちに比べれば…私はとてもとても素晴らしいと思うのだけれど。

依頼人と顔を合わせる必要もないし、醜い花たちを迎えなくても済むし。

ああ、もっと綺麗な花をみたいなあ。」

青年が見つめる先にあるもの。

それは、枯れてしまった2輪の花。

どちらも萎びて、茎にすら水が行っていないのか、くにやりと折れ曲がっている。

それを青年は、何を言うでもなくただじっと見ていた。

見渡すばかりの草原に、一人の女性が立っている。

女性というよりも、どこか少女といった方がしっくりくるような表

情。

今、その表情は驚きに満たされている。

自分の手を空に透かし見て、自分の足をぺたぺたと撫で、最後に自分の顔に手をやった。

しばしの間のあと、今度は呆けた表情で遠くを凝視している。

そこにいるのは、一人の男。

彼女の外見が変わってしまっただけに恋焦がれ、どれだけ願っても会うことの叶わなかった男。

男はのんびりとした歩調で、ゆっくりと女に近づいていく。

女は動かない。

ただじっと、男の動きを目で追っている。

男が目の前、小さな声で呟いたら相手に届くくらいの距離に来た時、女はようやく口を開いた。

「……本当に、本物……？」

「なら、僕に触ってみますか？」

穏やかな表情で、ずっと昔にみたそのままの表情で笑うから、嬉しくて女は涙を流す。

それを見ながら、焦った様子もなく泣いた女の頭に男は手をのせた。

「……ずっと、一人だったんですね。」

こくこくと、首を振るだけの小さな返事。

男はただ穏やかに、女の頭を撫で続ける。

「大変だっただろうに…。」

男にしがみつくように、まるで涙を堰き止めていたものが決壊してしまったかのように、女は泣き続ける。男の腕の中で息を殺してそんな彼女に、男は優しげな笑顔を向ける。

「よく、がんばったね。」

その言葉が本当か確かめるかのように、女は顔を上げる。じっと、それが本当の事だと確かめるかのように。

男と女の影が一つになった。

どれだけ願っても、叶わない事がこの世には存在する。

だから人はその願いに縋って、その夢を頼って何とか生き残ろうと必死にあがく。

時に夢の本質を忘れ、夢はただの言葉に成下がる。

落ちた夢は、その思いの大きさに比例して自分の行き場を探し出す。

夢は、その人間の本質である。

生み出した人間のところより行き場はない。

夢は必死に消えまいと、思い出してほしいと人に訴えかけるでしよう。

？私を思い出してほしい？と。

ゆっくり、ゆっくりと夢は浸食を始める。

それが正しいともおかしいとも感じずに、ただただ夢を作った思い出を夢に見せていくだけ。

ああ、惜しむらくは人の身にそれが追いつかない事。

平気であれば、夢のために生きることでもできようものの。

少女の一吹きで、小さな花は消えてしまふ。

跡形もなく、まるで灰のように吹き飛んでしまふ。恐ろしく簡単に。

萎れた小さな二輪の花は、見ようによっては支え合っているようにも見えた。

花よ、いつまでも私のそばで咲いていておくれ。

その高貴な色を、忘れられるように。

諦めてしまった事を全て忘れさせておくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8256x/>

気ままに短編

2011年10月22日21時12分発行